

令和 7 年度 入学試験問題

総合問題(教育支援専門職養成課程・教育ガバナンスコース)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答はすべて別紙解答用紙に記入しなさい。
3. 解答用紙は2 枚、草稿用紙は2 枚です。
4. 解答方法が論述方式の場合は、1 マス目から書き始め、1 文字空けたり、改行したりせずに横書きで書き進めなさい。
5. 各解答用紙には、受験番号を記入する欄がそれぞれ 1 箇所 あります。
すべて記入しなさい。
6. 試験終了後、問題冊子と草稿用紙は持ち帰りなさい。

I 次の英文を読んで、以下の問 1 ～ 4 に答えなさい。

Over 40% of Japan's municipalities at risk of vanishing, study finds

More than 40% of Japan's municipalities might eventually vanish due to
① a sharp population decline brought on by a chronically low birthrate,
according to a study by a private group of experts.

The study released Wednesday by the Population Strategy Council (PSC) deems local municipalities that would likely see their population of women age 20 to 39—the core childbearing age group—reduced by half between 2020 and 2050 as having a risk of disappearing.

Of 1,729 local municipalities nationwide, the study identified 744 with such a risk.

The latest report pointed out that municipalities tend to focus more on measures aimed at preventing population outflows toward urban areas such as Tokyo, rather than at boosting birthrates. In addition, there are instances of neighboring cities and towns competing with one another to attract younger populations, the study found.

② “Such zero-sum game-like efforts do not necessarily lead to an increase in birthrates, and their effectiveness in changing the overall trend of population decline in Japan is limited,” the report said.

注：municipality 地方自治体，chronically 慢性的な，birthrate 出生率，
childbearing 出産

出典：Francis Tang, *The Japan Times*, Apr 24, 2024 (抜粋)

問 1 下線①で指摘されている課題を、日本語で 60 字以内にまとめなさい。

問 2 上記英文では、下線②で示された課題に対し、地方自治体が行っている対策が 2 つ示されている。この 2 つを日本語で簡単に述べなさい。

問 3 下線②は, “zero-sum game-like (総和がゼロになるゲームのような)”との表現を使い, 問 2 で示された対策の問題点を指摘している。具体的に何が問題なのか, 日本語で 100 字以内にまとめなさい。

問 4 下線②を踏まえ, どのような対策が考えられるか。またなぜその対策が有効なのか。具体的に, 日本語で 200 字以内にまとめなさい。

Ⅱ 次の文章を読んで、以下の問 1 ～ 3 に答えなさい。

高校の女子生徒 A さんと男子生徒 B さんが、文系クラスと理系クラスのどちらへの所属を希望するか話しています。

A さん「私は女性だけど、理系クラスを希望するつもりです。」

B さん「意外ですね。女性は理系科目より文系科目が得意なのに。」

A さん「私は将来、薬剤師になりたいと思っているから理系クラスを希望します。薬剤師は女性らしい職業でしょう。」

A さんと B さんの会話には、アンコンシャス・バイアス(unconscious bias)が含まれていることが指摘され得ます。アンコンシャス・バイアスとは、無意識の思い込みのことです。これまで過ごしてきた社会環境や過去の経験で培われた知識は、時に無意識の思い込みとして働くことがあるのです。しかしその思い込みは、しばしば事実とは異なることがあります。たとえば、性別による教科の得意・不得意をめぐっては、全国的な学力調査に関する専門家会議の分析(2024 年 5 月 16 日)によると、小学校 6 年生と中学校 3 年生の理科や算数・数学の得点について、男女の平均値に実質的な差はないことが示されています。

アンコンシャス・バイアスは自然に培われていくため、誰もが潜在的にもっており、もっていること自体は問題ではありません。しかし、アンコンシャス・バイアスに無自覚な場合、さまざまな問題が起こることが考えられます。

問 1 図 1 ～ 4 は、東京都が行ったアンコンシャス・バイアスに関する実態調査の結果の一部です。これらの図から読み取れる内容として適切なものを 2 つ選びなさい。

なお調査・分析結果については、「そう思う」と「どちらかというと思う」を合わせて《思う》、「どちらかというと思わない」と「そう思わない」を合わせて《思わない》とする。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

出典(図1・図3)：東京都生活文化スポーツ局，性別による「無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)」に関する実態調査，2023年

出典(図2・図4)：東京都生活文化スポーツ局，性別による無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)に関する実態調査，2024年

注：四捨五入等により数値の合計が100.0%とならない場合がある。

- ① 高校1・2年生では、性別で教科の得意・不得意があるという考えについて、《思わない》人の割合は、女性より男性が小さい。
- ② 性別で教科の得意・不得意があるという考えについて、《思う》人の割合は、小学校5・6年生と高校1・2年生のいずれも、女性より男性が大きい。
- ③ 高校1・2年生では、性別で向いている仕事と向いていない仕事があるという考えについて、《思う》人の割合は、男性より女性が大きい。
- ④ 性別で向いている仕事と向いていない仕事があるという考えについて、《思わない》人の割合は、小学校5・6年生より高校1・2年生が小さい。
- ⑤ 性別で教科の得意・不得意があるという考えについて、《思う》人の割合は、小学校5・6年生と高校1・2年生のいずれも、男性と女性とで違いはない。
- ⑥ 性別で教科の得意・不得意があるという考えについて、《思う》人の割合は、小学校5・6年生の女性より高校1・2年生の女性が大きい。
- ⑦ 性別で向いている仕事と向いていない仕事があるという考えについて、《思う》人の割合は、高校1・2年生の男性より小学校5・6年生の男性が大きい。

問 2 性別に関するアンコンシャス・バイアスに無自覚な場合、どのような問題が生じるか、100字以上200字以内で論じなさい。

問 3 問2で指摘した問題の解消に向けて、誰を対象にしたどのような取組みが考えられるか。200字以上300字以内で具体的に提言しなさい。